



水盤のある中庭

熱押形鋼に、 技術者のスピリット を感じた

島根県芸術文化センター、ちひろ美術館・東京、とらや赤坂店など、さまざまな建築物で熱押形鋼が使われてきた内藤廣先生。建築にける情熱と、熱押形鋼をはじめとする鉄と建築の可能性について語っていただきました。

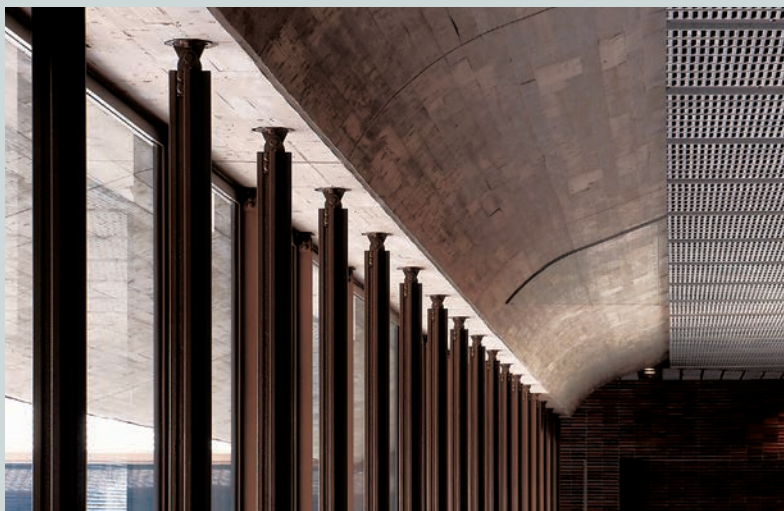
建築家

内藤 廣氏

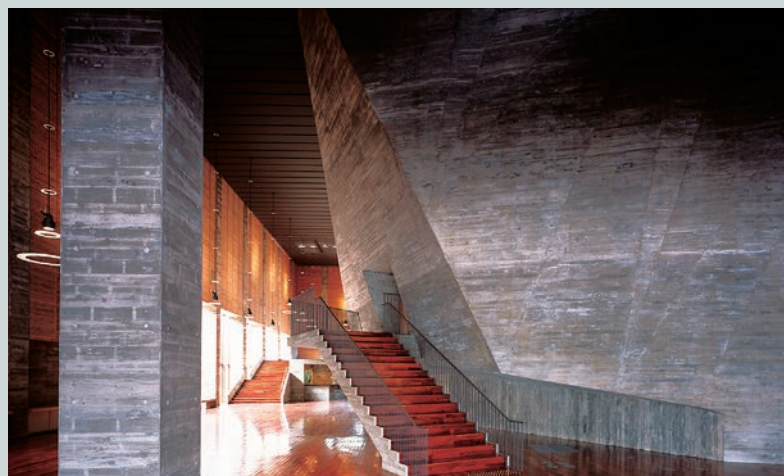
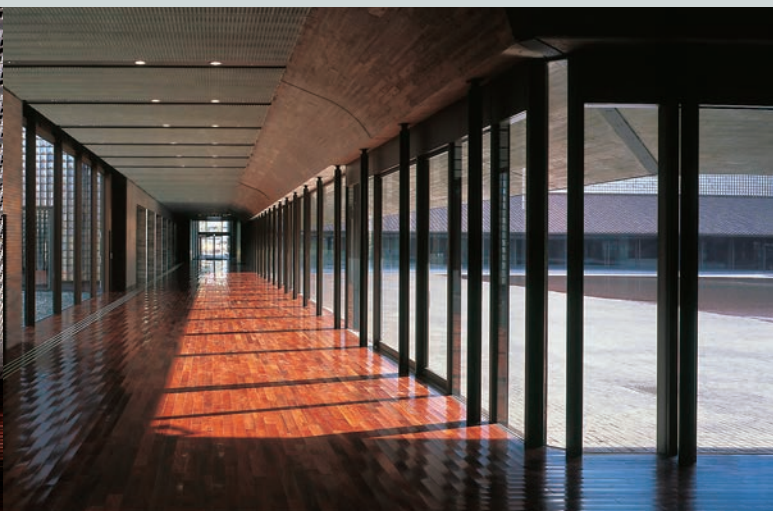
(ないとう・ひろし)

1950年神奈川県生まれ。内藤廣建築設計事務所代表。東京大学名誉教授。76年早稲田大学大学院修士課程修了。フェルナンド・イゲラス建築設計事務所（スペイン・マドリッド）、菊竹清訓建築設計事務所を経て、81年内藤廣建築設計事務所を設立。2001年東京大学大学院工学系研究科社会基盤学助教授、02～11年同大学教授、07～09年度グッドデザイン賞審査委員長、10～11年東京大学副学長を務める。



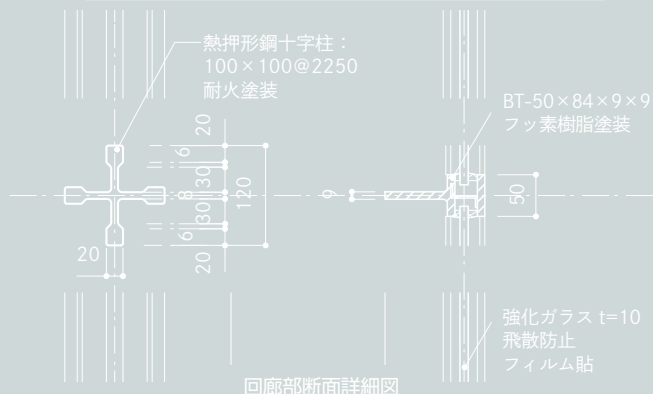


回廊



大ホールホワイエ

島根県芸術文化センター



その地に流れる時のイメージを描く

——内藤先生は建築家として施主の想いをどのように受け止め、お仕事を進められているのでしょうか。

内藤 施主といってもさまざまな方がいます。個人や企業の場合もあれば、公共の建築という場合もあります。でも本当の施主は誰なんだろうというつも思うのです。例えば公共建築であれば知事や市長、または自治体の担当者という考えがちなのですが、本当の施主は県民や市民の皆さんなんですよ。なかなか皆さんの声は直接聞けないんだけど、この視点を忘れてはいけません。けれど実はそれだけでも駄目で、会えない施主もいるわけです。それは誰かという、その地域をつくり上げてきた、もう亡くなってしまった人たちが、さらには、これから生まれてくる未来の人たち。彼らも僕にとっては大切な施主なんです。建物は50年、100年と生きていくわけだから、そこに想像力を働かせることが重要で、担当者や現場の職人さんたちともできる限りそうした話をします。あなたの息子や孫にも誇れるものをつくりたいねと。

——建築に過去や未来の歴史を取り入れていくという発想は、とても豊かなものに感じます。これまで印象に残った声はどんなものでしたか。

内藤 印象深かったのは島根県芸術文化センターでのことです。これはとても大きな建物で、1500席と

400席の劇場に美術館が併設されていて、住宅街も隣接しています。当時もできるだけそうした想像力を働かせ建設に携わったつもりでしたが、地元の人たちがどう受け止めてくれるか心配だったんです。オープニングのとき、近所のご婦人が、僕を設計者だと知らずに話しかけてきたんですよ。

「この建物、すごく不思議なんだよね」と言つので「何がですか？」と聞いたら、「なんだかずっと前からここにあったみたいな気がするんだよね」と言つのです。これが今まで聞いたなかで、一番うれしい褒め言葉でした(笑)。その土地に流れている時間に参加させてもらったといった感じがしたからです。実際、地元の皆さんに愛してもらっていて、公共建築物としての来館者数は人口密度あたりで全国2位になったこともあります。

——土地の記憶を建築に込めるという意味では、あらかじめその場所についてかなり勉強されるのでしょうか。

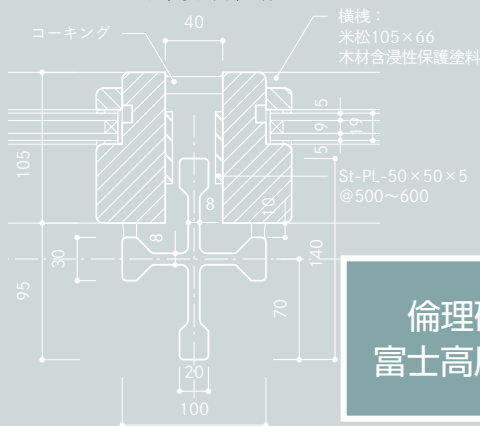
内藤 本来ならばそこに1年中いらればいいんですけど、そういうわけにもいきません(笑)。だから僕の場合、まずはその土地を訪れて、何も考えずにボーっとします。すると、いろいろなものが入ってくる。風、匂い、音、その土地に何百年も流れている目に見えないものを感じることから仕事を始めます。建築家って、そうした時間のイメージを描くことが本当のプロフェッショナルな作業だと思うんです。図面を描くといった技術的な作業はあくまで付随的なものに過ぎません。



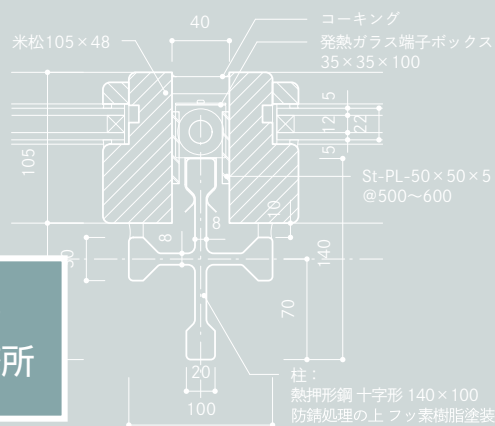
木製サッシと熱押形鋼



エントランスホール



一般部断面詳細図



発熱ガラス部断面詳細図

倫理研究所 富士高原研修所

鉄は現代建築においても 重要な存在

——多くの建築物に熱押形鋼が使われています。この素材との出会いを聞かせただけですか。

内藤 熱押形鋼を知る前、小さな柱などはL形鋼を組み合わせたつもりでいたのですが、もう少し視覚的に効果のある材料はないかと探していました。あるときサッシに熱押形鋼を使っているパンフレットを見て、これは面白いと思って新日鉄光製鉄所（現在の日本製鉄九州製鉄所大分地区光鋼管部）に見学に行きました。

熱押形鋼は矯正するとき、表面の酸化鉄が飛び散ります。それがナイアガラのような感じで、世にも美しい光景なんです。そのときから熱押形鋼に惚れ込んでしまっ、なんとか建築に使えないかと新日鉄の方に相談しました。熱押形鋼が冷える際の変形を防ぐため、できるだけ表面積を増やし、熱が均等に放出されるよう十字形の断面にするなど、いろいろなスタディをしました。おそらく構造材として熱押形鋼を採用したのは僕が初めてだと自負しています。最初に使ったのは倫理研究所の富士高原研修所です。それ以降、何度も使っています。

——熱押形鋼の使用は内藤先生にとっても新しい挑戦だったわけですね。

内藤 そうですね。ものづくりをする人間として挑戦する気持ちを常に持つように心がけています。これは

素材を製作する側でも同じことなのではないでしょうか。僕は熱押形鋼にも技術者のスピリットを感じたし、それがこだわって使っている理由の一つでもあります。

——建築材料には鉄のほかにコンクリート、木材、アルミ、チタンなど、さまざまなものがあります。先生にとって鉄はどんな材料でしょうか。

内藤 現在、建築界では木造が流行っていますが、僕は現代建築とはすべて鉄筋コンクリートとのハイブリッドだと考えています。なぜなら、たとえ木造建築でも、基礎部分には必ず鉄筋コンクリートを使用していますから。だから鉄は、現代建築においても非常にベーシックな、重要な存在なんです。

昔は若いスタッフたちを君津製鉄所（現在の日本製鉄東日本製鉄所君津地区）に連れていき、製造現場を見学させていました。やっぱり鉄が生まれるときの、あの原初的なエネルギーはすごく魅力的です。高炉から鉄の塊が生まれ、それが薄板のような高度な製品に変化していく。製鉄所には人類の英知の歴史を感じるし、それはほかの金属では決してかなわない部分だと思います。

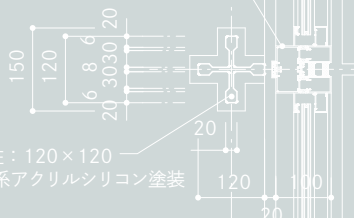
——鉄にどんな可能性を感じていらっしゃるのでしょうか。

内藤 僕の従兄弟が日本製鉄で研究職をしています。薄板を圧延する際の冷却比率の研究をしているそうですね。冷却も含めたメタラジー（金



絵本カフェ

ガラス FL6+A6+熱線吸収FL5
アルミ断熱サッシ



ちひろ美術館 ・ 東京



多目的展示ホール



属工学)や圧延技術など、さまざまな技術の融合により、従来の鉄鋼製品と比較して数倍の強度に高めることができるという話を聞くと、鉄にはまだまだ知られていないことがたくさんあって、可能性に満ちている素材なんだと感じます。

一方、心配している面もあります。町工場などで鉄を扱う日本の職人さんがどんどん減っています。工場を訪ねると、職人の名札に日本人の名前がなかったりする。海外の研修生ばかりなんです。鉄の特性を知っている職人が日本にほとんどいなくなつて、ちよつとしたものをつくる時も、外国に頼まなければならなくなる。そんな未来が現実になりかねません。それは日本が培ってきた鉄文化、ものづくり文化の衰退につながるような気がしています。この点は真剣に考える必要があるのではないでしようか。

小さな違和感が 世の中を変えていく

——現在のコロナ禍は、建築の未来にどんな変化をもたらすとお考えでしょうか。

内藤 僕は建築つてそんなに軽々と変わっていくものじゃないと思ってるんです。皆そんな見でやってきたのつて(笑)。でも、世の中の大きな歯車がコトンと一つ回ったという感じはあります。多くの人たちは今まで都会の超高層ビルのガラス張りのオフィスで働く様子を格好いい

と想っていたけれど、「あれ、ちよつと違うんじゃないか」と感じ始めた。そんな普通の人たちの小さな違和感が、やがて大きく世の中を、そしてやがては建築を変えていく可能性がある。今すぐ慌ててどうこうではないけれど、その先に来る社会を建築家は一生懸命考える必要があると思います。

——ポストコロナの時代、内藤先生ご自身の建築はどのように変化していくでしょうか。

内藤 つい僕たちはポストコロナと言つてしまつけれど、少し前まではポスト3・11だったし、その前はポストリーマンショック、ポスト9・11、ポストバブルと言つていました。そうやって分断して時代をくくつてしまいますが、歴史というものはすべて地続きで、地層のように重なつていき、そのうえを我々は生きていくわけです。その認識でコロナ後も考えるべきではないでしようか。

今後、IT技術の革新はもちろん、地球の気候変動や超高齢化社会も現実問題として迫ってきます。50年、100年先を生きる建築は、そういう時代をくぐつていかななくてはならない。それは人類が未体験の社会を生きることであります。そこには前例のないクリエイティビティが求められるわけです。ある意味ワクワクするような状況でもあります。そうしたことを全部を引き受けて、自分としては過去にも未来にも開かれた建築をつくつていきたいと思っています。